

鹿児島城跡（吉野堀）出土の近代泉州谷川瓦

—近代瓦の広域流通の一端—

西野元勝

はじめに

近年、近世遺跡の発掘調査例が増加している。中でも、近世城郭の調査事例が進んだことで、近世瓦の研究は飛躍的に進んだ。特に、刻印や軒丸瓦、軒平瓦の瓦当文様の分析から、広域流通する瓦の存在が明らかになっている。

鹿児島県内でも、大阪府の堺瓦が役所（指宿市津口番所跡）や上級武士の屋敷跡（鹿児島城下町）、海運業で栄えた豪商屋敷跡（南九州市仲覚兵衛屋敷跡）など、藩とのつながりが深い経済活動が行われるところから出土することが確認されている⁽¹⁾。

また、鹿児島城跡では、軒丸瓦、軒平瓦の瓦当文様および胎土分析から、17世紀～18世紀前半にかけて熊本県の天草瓦（富岡城跡）や長崎県の長崎瓦（長崎奉行所跡等）が出土していることが確認され、刻印の分析から18世紀後半の大阪府の大坂市周辺の大坂瓦（瓦町遺跡）や熊本県益城町の土山瓦が出土するなど、他地域の瓦がもたらされていることが確認された⁽²⁾。瓦は、海を通じて様々な文物を入手していた近世鹿児島城下町の特徴を示す遺物の一つであると位置づけられる（第1図）。

しかし、近代瓦の広域流通については、建築学や民俗学等の研究はされていても、考古学で明らかになっている例は少ない。近代遺跡の発掘調査が少なく、消費地の報告例が少ないため、窯跡がある生産地周辺での様相はわかっても、その瓦がどこまで、どのような形で流通しているかを解明できていない状況である。

近年、産業関連遺跡や戦争関連遺跡の発掘調査が行われ、幕末～第二次世界大戦の時期までの近代化遺跡の発掘調査事例が増加しており、今後はさらなる増加が予想される。

ある程度生産地の状況がわかっており、広域流通している近代瓦は、近世の幕藩体制とは異なる近代の流通とその変化を明らかにする上で重要である。今回は、鹿児島城跡（吉野堀）で出土した大阪府泉南郡岬町で生産された泉州谷川瓦の事例から、近代瓦の広域流通の一端を明らかにしたい。



第1図 刻印からみた近世の県外生産瓦
(註2①文献より)

1 鹿児島城跡（吉野堀）出土の泉州谷川瓦

(1) 鹿児島城跡（吉野堀）発掘調査の経緯

鹿児島城跡では、令和元年～令和3年にかけて、国史跡指定のための鶴丸城跡保全整備事業に係る発掘調査が行われた。令和2年度には、城城北端にあたる吉野堀（吉野橋堀ともいう）の位置を確認するため、鹿児島城跡（吉野堀）の発掘調査が行われた。

(2) 吉野堀（第2図）

宝暦6（1756）年の「監察使答問集上」によれば、「吉野橋と堀のこと。岩崎口から海際まで四町十六間。吉野橋から上へは二町七間。堀を修復する際に公儀に届けた時の幅は、吉野橋で十間半、新橋で十六間、海際で二十六間で、深さは六尺五寸。」とある⁽³⁾。堀は岩崎口の出口付近から始まり、海に近づくにつれて幅が広がっている。吉野堀には、吉野橋、新橋の2つの橋が掛かっていた。天保年間（1830～1843）「鹿児島城下絵図屏風」には、新橋の擬宝珠に慶長17（1612）年の銘があるとの記載があることから、この時期には既に堀と橋があったようである。安永4（1775）年には柵門を新橋・吉野橋に建て、それぞれ番鎮が設置され⁽⁴⁾、のちに門は新橋御門・吉野橋御門に改称されている⁽⁵⁾。吉野堀は、明治5（1872）年には、「鎮台分営の門の下通り・吉野橋入口・元中ノ辻番所の角へ柵門を建て、調練の時には閉じるようにする」とあり、まだ埋め立てが行われていないが、明治17（1884）年「鹿児島市街略図」では、堀が描かれず市街地化していることから、この段階では既に埋め戻されたと考えられる（第4図）。

(3) 高野山最大乗院

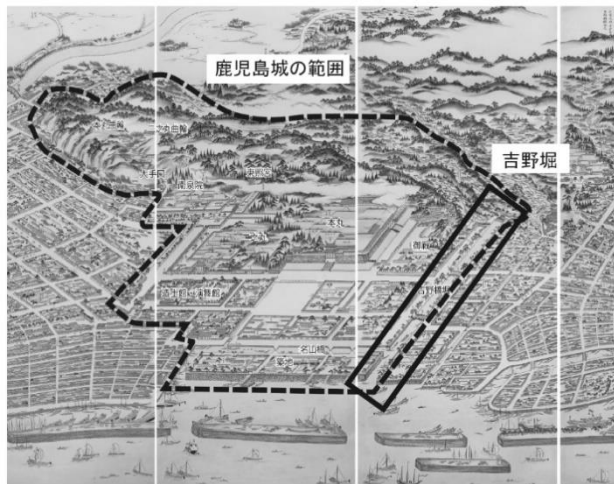
発掘調査地点は、鹿児島市長田町に所在する（第3図）。現在、高野山最大乗院の境内の一部である。高野山最大乗院は、清水城跡にあった島津氏の祈願寺で、薩摩藩最大の真言寺院であった経国山寶成就寺大乘院が明治2（1869）年の廃仏毀釈によって廃寺になった後、現在地に再興された寺院である。その再建時期は同11・12（1878・1879）年頃と考えられ、当初は説教所として復興し、現在に至る。同17（1884）年「鹿児島市街略図」には既に最大乗院の記載がある。この地図では、最大乗院とその東西の区画は、細長くなっている。この細長い区画は、吉野堀を埋め立てた際の名残であると考えられる。そのため、この最大乗院は、吉野堀の埋立地に再興されたと考えられる（第4図）。

吉野堀の推定線上には、島津氏の菩提寺であった玉竜山福昌寺の移転予定地も含まれている。大寺院

の復興のためには土地が必要であり、吉野堀の埋め立て地は、都合がよかったのだろう。吉野堀跡地での大寺院の復興は明治期の都市計画の一部であった可能性がある。

(4) 発掘調査の成果

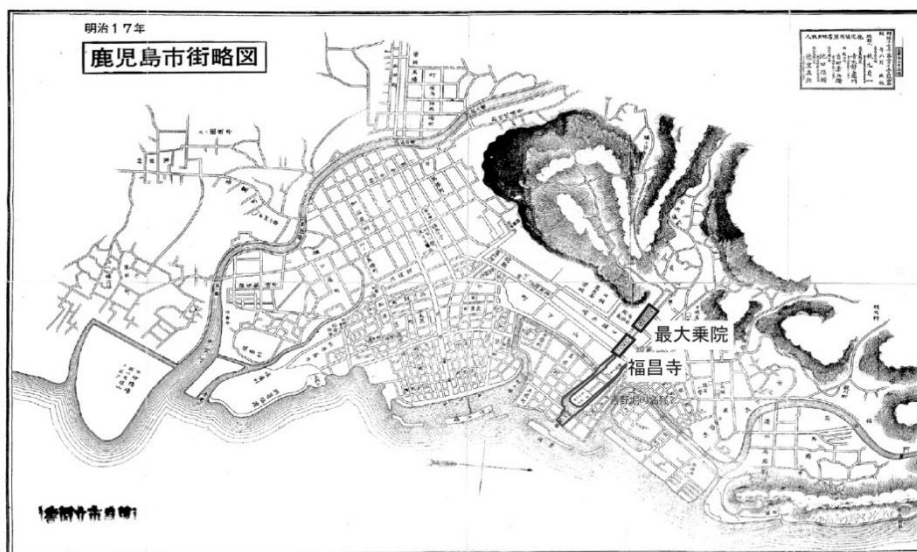
発掘調査は、高野山最大乗院の境内に3m×3mの小規模なトレンチを設定して行った。その結果、地表下約1.8mより下で明治初期に吉野堀を埋めた際の埋土と考えられる厚い造成土が確認された。このことにより、吉野堀の位置が想定できることとなった。また、高野山最大乗院の前身である説教所の池に伴うと考えられる高さ約132cmの石垣が確認され（第5図）、古墳時代の土器、近世・近代の陶磁器、瓦が出土した⁽⁷⁾。



第2図 江戸時代後半の鹿児島城と吉野堀
(鹿児島城下絵図屏風(玉里島津家資料)を一部改変)



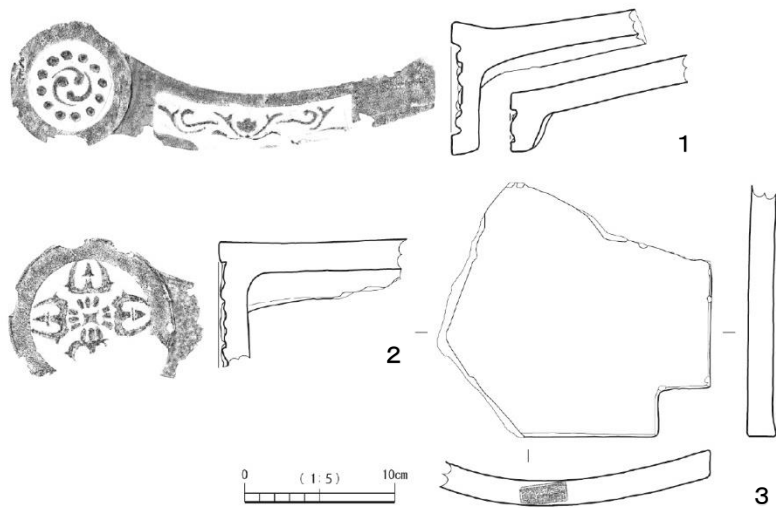
第3図 鹿児島城跡(吉野堀)の位置
(註7文献より)



明治17(1884)年「鹿児島市街略図」
第4図 地図に残る吉野堀が埋め立てられた地形
(註7文献より)



第5図 鹿児島城跡（吉野堀跡）完掘状況全景
（註7文献より）



第6図 鹿児島城跡（吉野堀跡）で出土した泉州谷川瓦
（註7文献より）

（5）出土した泉州谷川瓦（第6図）

瓦は近世～近代のものが出土したが、その中で在地の胎土より濃い灰色の胎土で、厚さが薄く、稜線の調整がシャープに調整された瓦が混じっていた。そのうちの1つには、刻印が刻まれており、その刻印の分析から泉州谷川瓦であることが確認された。

第6図1は、軒棧瓦（註2①文献、鹿児島城跡軒平棧瓦分類 D-046）である。丸部は、密教法具の三鈷杵の文様がある。真言宗寺院のための特注品であると考えられる。2は、橘唐草文の大坂式軒棧瓦（鹿児島城跡軒平・棧瓦分類 A-053）である。焼成は良好で、瓦当も稜はシャープである。瓦当上端は面取りする。瓦当は顎貼付け。3は、棧瓦である。頭部側面に「□に泉州谷川中喜」の刻印（鹿児島城跡瓦刻印瓦刻印分類 185）がある。胎土や製法、刻印の分析の結果、これらの瓦は現在の大阪府泉南郡岬町で生産された泉州谷川瓦であると想定された⁽⁸⁾。

境内の限定的な調査であるため、全ての堂舎にこの瓦が使われたかは不明である。ただし、出土層位の検討から、少なくとも明治11・12年～第二次世界大戦後の造成までの期間のどこかで高野山最大乗院の堂舎にこの瓦が使われたことは間違いない。

3 泉州谷川瓦（第7図）

（1）泉州谷川瓦の概要⁽⁹⁾

大阪府泉南郡岬町多奈川谷川を中心とする地域は、第二次世界大戦前まで瓦の生産地としてその名を全国に知られていた。この地は、瓦を焼くのに適した

良質の土が採れ、海岸に近いことから船での出荷が容易で、近接する谷川港は、搬出港として大阪府や和歌山県といった近畿地方南部を中心に四国や関東方面まで瓦を搬出していた。

泉州谷川瓦は、和歌山県紀の川市粉河寺大門等の多くの寺院建築に今でも残り、第二次世界大戦で焼失した国宝和歌山城にも葺かれていた。

（2）泉州谷川瓦の生産時期⁽¹⁰⁾

瓦生産の開始時期は不明だが、伝承によると、奈良時代に行基がこの地を訪れ山土が瓦に適していることから瓦製法を伝えたとされる。現存する瓦で最も古い物は、和歌山県根来寺の国宝多宝塔にある「永正12（1515）年谷川嘉左右衛門」銘をもつ雁振瓦である。その後記年銘が確認できるのは、大阪府海南市黒江浄土国寺の「天和2（1682）年」銘をもつ雁振瓦でその間の生産状況は不明である。

少なくとも近世中頃には、瓦の一大生産地となり、「和泉・谷川」の鬼瓦が全国各地でみられるなど、泉州谷川瓦は広域流通する。

明治期は、泉州谷川瓦の最盛期で、谷川瓦株式会社を組織して品質の低下を防ぐとともに、宮内省御用達の瓦として四国～関東まで広域に流通していた。

しかし、第二次世界大戦中の強制移転による廃業等で打撃を受け、さらに戦後は三河・四国・淡路方面から手頃な製品が出回り、また原料土、瓦職人の確保が困難になったことから瓦生産は徐々に衰退していった。

鹿児島城跡（吉野堀）で出土した軒棧瓦と棧瓦は、

明治 12・13 年～第二次世界大戦の時期のものであることから、泉州谷川瓦が全国に搬出されていた時期にもたらされたものである。

(3) 鹿児島城跡(吉野堀)と同じ刻印⁽⁴⁾

泉州谷川瓦には、多くの刻印が刻まれている。集成された泉州谷川瓦の刻印には、鹿児島城跡(吉野堀)で出土した「□に泉州谷川中喜」の刻印(鹿児島城跡瓦刻印瓦刻印分類 185)と全く同じ刻印が含まれている(第8図)。この存在は、泉州谷川瓦が鹿児島にもちこまれた証拠となる。

3 泉州谷川瓦が高野山最大乗院で用いられた経緯

泉州谷川瓦が鹿児島までもたらされたことは間違いなく、最大乗院の堂舎の瓦として用いられたことが考えられる。なぜ泉州谷川瓦が高野山最大乗院の堂舎の瓦として用いられたかは、文書や売買の記録が残っていないため不明である。

ここでは、その経緯を推定する。①近世～近代の鹿児島城跡やその城下町で出土する軒平瓦・軒棧瓦の瓦当は、文様が大坂式もしくはそれを在地で変化させた鹿児島式のものが多い。また、鹿児島城跡では現在の大阪府大阪市付近で生産された大坂瓦が、城下町では堺市で生産された堺瓦が出土している。そのため、鹿児島県は、近世の段階から現在の大阪府から直接瓦やその技術を手に入る環境にあったといえる。

②泉州谷川瓦は、近代以降近畿地方南部を中心に四国～関東地方まで広域に流通していた。

③真言宗総本山の高野山がある和歌山県内では、根来寺などの真言宗の大寺院で泉州谷川瓦が使用されていた。密教法具の三鈷杵の文様がある軒棧瓦の出土を考えると、高野山最大乗院は、真言宗寺院としてふさわしい瓦を求めたと想定できる。その際、真言宗のネットワークによりその総本山である和歌山県内でも広く流通していた泉州谷川瓦を選択した可能性がある。

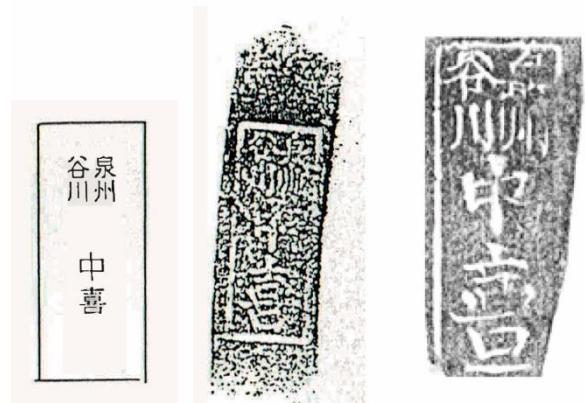
上記の①～③の鹿児島県の近世から続く大阪との物流や真言宗の宗教ネットワークという理由が合わさって、泉州谷川瓦は最大乗院で用いられたと考えられる。

高野山最大乗院で泉州谷川瓦が用いられたことが、当時の鹿児島では通常の流通の範囲で考えられることなのか、それとも真言宗の宗教ネットワークがあったことによる特殊な事例であったかは現在のとこ

ろ不明である。今後の近代化遺跡の発掘調査の増加、近代建築の解体等に伴う瓦の分析を待ちたい。



第7図 岬の歴史館谷川瓦展示室
(岬町教育委員会生涯学習課『(仮称) 岬の歴史館基本計画』より)

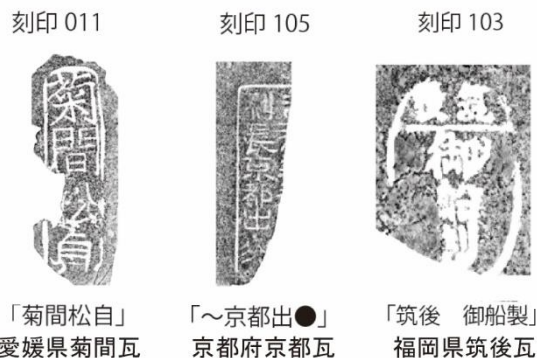


①大阪府泉南郡岬町 「中喜」銘刻印 ②鹿児島城跡(吉野堀跡) 「中喜」銘刻印

第8図 両地域でみられる刻印の比較
(①註11文献より、②註7文献より)

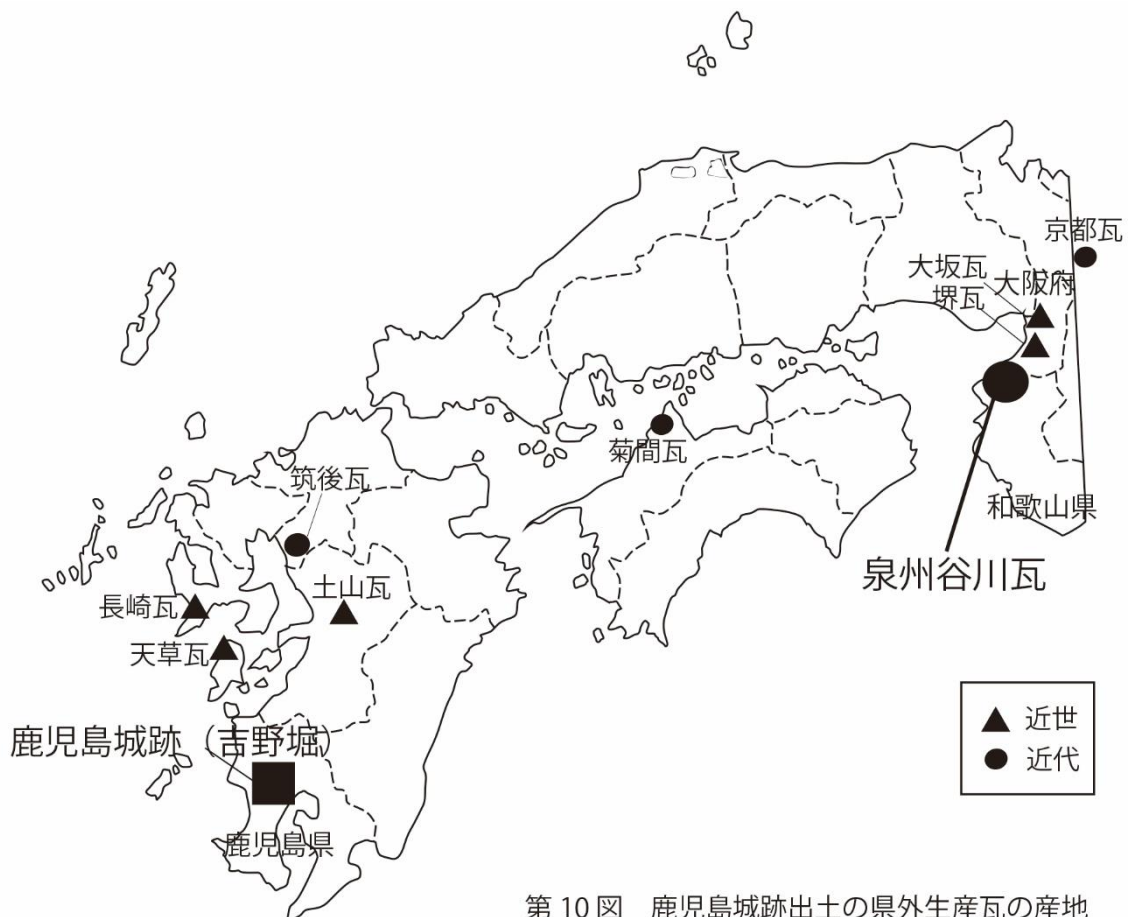
おわりに

今回は、鹿児島城跡(吉野堀)で出土した泉州谷川瓦を紹介し、その入手方法を検討した。近代では、考古学に文献史学や民俗学、建築学の成果を合わせることで、出土した瓦がどこで焼かれたのか、どういった経緯で入手したかといった瓦の来歴や瓦を通じた広域流通に迫ることができる。



「菊間松自」愛媛県菊間瓦 「〜京都出●」京都府京都瓦 「筑後 御船製」福岡県筑後瓦

第9図 刻印からみた近代の県外生産瓦
(註2①文献より)



第 10 図 鹿兒島城跡出土の県外生産瓦の産地

特に、城跡や御仮屋、役所といった江戸時代の公的施設の多くは、近代も学校等の公的施設として引き続き土地利用されていることから、近代瓦も多く出土している。そのすべてが報告されるわけではないが、これらの遺跡で出土する近代瓦は、その時代の広域流通を知る上では重要である。近代に鹿兒島県立中学造士館や官立第七高等学校造士館等として利用された鹿兒島城本丸跡では、刻印瓦の分析から、地元の日置瓦が中心にはなるものの、泉州谷川瓦以外にも愛媛県の菊間瓦、その他京都府や福岡県の筑後瓦（柳川瓦・城島瓦など）が出土しており（第9図）、広範囲の地域の瓦が使用されていたことが明らかになっている⁽¹²⁾。さらに、未だ産地が不明な瓦も多くあることから、さらに多くの県外で生産された瓦がもたらされたと考えられる。これらの刻印瓦の多くは、瓦当がない平瓦か棧瓦である。

発掘調査で大量に出土する瓦は、現場段階での選別の対象となる。近代瓦、特に軒丸瓦・軒平瓦といった瓦当がない瓦は選別されることが多い。しかし、これらの瓦の中には、刻印で近代の広域流通の実態を解明するのに有効なものが含まれている。瓦の出土が予想される発掘調査の際には、瓦当をもたない

平瓦・棧瓦に関しても現場段階での洗浄・刻印の確認を行った上での選別、それが可能になる発掘調査前段階での予算獲得、調査計画の設計が重要になる。

また、発掘調査報告書でも紙面の都合上近代瓦が占める割合は少なく、瓦当のない瓦は掲載されない場合も多い。だからこそ、刻印を含めた瓦からどのような情報が得られるかを知っておく必要がある。

今後、これまであまり調査対象になっていなかった近代遺跡の発掘調査事例は増加していくことが予想される。その際に、出土遺物からどのような情報を引き出すことができるか、それからどのようなことがわかるか、ということを発掘調査前段階で知っておく必要がある。遺跡から大量に出土する瓦は、様々な情報を持っている。様々な調査・研究方法を検討していくことで、近代遺跡から情報を最大限引き出すことにつなげていきたい。

註

- (1) 上田洋子 2022 「山川港津口番所の堺刻印瓦の紹介－県内の出土例と合わせて－」『地域考古学研究の可能性Ⅱ中摩浩太郎さん退職記念論集』

指宿市考古博物館時遊館 cocco はしむれ記念論
集刊行委員会 ほか

- (2) ①鹿児島県立埋蔵文化財センター2022『鹿児島(鶴丸)城跡―北御門跡周辺・御角櫓跡周辺・能舞台跡ほか―』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(214), ②阿比留士郎 2021「熊本県益城町所在土山瓦生産地について」『縄文の森から』第13号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- (3) 鹿児島県立図書館 2013『鹿児島県史料集第52集 通昭録(1)』
- (4) 鹿児島県 1976『鹿児島県史料 旧記雑録追録六』1251号)
- (5) 鹿児島県 1976『鹿児島県史料 旧記雑録追録六』1252号)
- (6) 鹿児島県 1978(『鹿児島県史料 旧記雑録 追録八』1087号3)
- (7) 鹿児島県立埋蔵文化財センター2022『鹿児島(鶴丸)城跡―総括報告書―』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(215)
- (8) 鹿児島城跡出土瓦の分類は、前掲註2①による
- (9) 前掲註7参照
- (10) 岬町教育委員会 1992『谷川瓦調査報告書Ⅰ』―門瓦製造所・歌坂喜代一瓦窯―』
- (11) 全掲註9参照
- (12) 岬町史編纂室『岬町内瓦刻印拓映集2』
- (13) 前掲2①参照

<謝辞>以下の方々・機関から御教示・御指導を賜った。記して謝したい。(敬称略・五十音順)
阿比留士郎, 大久保浩二, 黒川忠広, 黒木梨絵,
金子智, 中原一成, 永濱功治, 前迫亮一, 三垣
恵一, 彌榮久志, 山下智沙子
鹿児島県立埋蔵文化財センター
岬町教育委員会

(にしの もとかつ 本館学芸課(兼)文化振興課
鶴丸城跡保全整備班主査)